

ラフカディオ・ハーンの間人観(3)ジェイ ン・オースティンをめぐって:東京帝国大学 英文科講師時代の講義録から

先川, 暢郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

108

(開始ページ / Start Page)

173

(終了ページ / End Page)

186

(発行年 / Year)

1999-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004808>

ラフカディオ・ハーンの人間観（3）

——ジェイン・オースティンをめぐって：

東京帝国大学英文科講師時代の講義録から——

先 川 暢 郎

1. はじめに

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn：1850–1904）は東京帝国大学英文科講師時代の講義に基づく著作『英文学史』の「前ヴィクトリア時代の散文—小説」の「女流作家」の項で、4人の女流作家をとりあげているが⁽¹⁾その中でフランシス・バーニー（Frances Burney：1752–1840）について大して重要視することもないとし、マライヤ・エッジワース（Maria Edgeworth：1767–1849）については今日では文学の専門家にしか相手にされないとして述べている。そして、ジェイン・オースティン（Jane Austen：1775–1817）については一番優れている作家であり、彼女の生活や経験の範囲は狭いものであったがシェークスピア的存在であり、どんなに過小評価してもフィールディング（Henry Fielding：1707–54）に匹敵し、二流作家ではないとし、高く評価しており好意的な態度をとっている様子が見られるのである。

2. オースティンの生涯とその時代背景

南イングランドのハンプシャー（Hampshire）のステイヴントン（Steventon）という自然に恵まれた小さな牧師館に生まれたオースティンは、上流に属する世襲の支配階級の出であった⁽²⁾。英国国教会の教区牧師であった父のジョージ・オースティン（George Austen：1731–1805）はこの時代の慣例にならって女の子に高い学校教育を与えようとはせず、7～9歳までの短期間を姉のカサンドラ（Cassandra）と共にオックスフォード（Oxford）と

サウサンプトン (Southampton) でコーリー夫人 (Mrs. Cawley) の私塾で教育を受けさせ、その後、レディング (Reading) のアビー校 (Abbey School) に入学させた⁽³⁾。

そして、オースティンは9歳で正規の教育を終えると、読書を中心に父母や兄弟に教育の手ほどきを受け⁽⁴⁾、当時の女性としての「たしなみ」ーピアノを弾いたり、絵を描いたりすることなどーの他にも仏語、イタリア語を身につけた⁽⁵⁾。

しかし、小説好きの一家に生まれた⁽⁶⁾オースティンは、シェークスピア (William Shakespeare : 1564-1616)、フィールディング、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith : 1728-74)、ファニー・バーニー、マライヤ・エッジワース、ジョンソン (Samuel Johnson : 1709-84)、スターン (Laurence Sterne : 1713-68)、スコット (Walter Scott : 1771-1832)、クラブ (George Crabbe : 1754-1832)、クーパー (William Cowper : 1731-1800)、リチャードソン (Samuel Richardson : 1689-1761) 等の文学作品に親しみ⁽⁷⁾、とりわけ、ジョンソン、クーパー、リチャードソン、クラブを高く評価した⁽⁸⁾。

また、芝居好きでもあったオースティンは、劇を書いたり、納屋や居間を舞台にして催した芝居では主役を演じて両親を楽しませたりもした⁽⁹⁾。

このような家庭環境の中に育ったことも手伝って、1790年からオースティンは『恋と友情』(Love and Friendship) などを含む物語や劇を、1795年頃からは長篇小説を書き始めた⁽¹⁰⁾。

そして、1801年には父の牧師職の引退にともない25年間を過ごし、作家としての名声の基礎を築いたスティヴントンを離れ、バース (Bath) に移住し⁽¹¹⁾、この間、『スーザン夫人』(Lady Susan) などを書いた⁽¹²⁾。

そして、父の死後サウサンプトン、チョートン (Chawton) へと移住した。

1816年頃より体調の不良を訴え、翌年の7月18日に亡くなった⁽¹³⁾。

ところで、18世紀から19世紀初頭にかけてのイギリスは第一次産業革命の時代であり、貴族社会にかわって階級社会をつくりだした⁽¹⁴⁾。

この時代の女性はほとんど教育らしい教育をあたえられず、財産の管理や処分でも法により許されず⁽¹⁵⁾、女性の社会的地位は国内においても、また、結婚すれば自由・財産・私権といったものを夫に引きわたしてしまわねばならないように、家庭内においても低く⁽¹⁶⁾男性と女性は精神的にも、肉体的にも全

く異なった特質を持っているものとみなされ⁽¹⁷⁾、女性は「しとやかさ、慎み、従順、素直さ、服従、細やかさ」といった道徳を役目（義務）として強要されていたのであった⁽¹⁸⁾。

また、職業選択の余地は存在しなく、女性の職業といえば、せいぜい家庭教師か寄宿制の女学校の教師しかなく⁽¹⁹⁾、女性が経済的安定を獲得して生きてゆくためには結婚以外に方法がなかったのである⁽²⁰⁾。

文学方面においては、女性が芸術家になることが奨励されない時代でもあり⁽²¹⁾、その上、小説は高い位置を占めておらず、文学形式として出版した時には軽い読み物としてとりあつかわれ、不真面目で、二流の文学ジャンルとみなされており、詩、神学、伝記などがより堅実だとみなされていた⁽²²⁾。

しかし、小説の分野においては女性作家が活躍した時代であり⁽²³⁾、とりわけ、ホレス・ウォルポール（Horace Walpole：1717-97）の『オトランド城』（The Castle of Otranto：1786）に起源をもつゴシック小説がもてはやされ⁽²⁴⁾、ラドクリフ夫人（Mrs. Ann Radcliffe：1764-1823）、ルイス（Matthew Gregory Lewis：1775-1818）、マチュリン（Charles Robert Maturin：1782-1824）、シェリー（Mary Shelley：1797-1851）らが輩出した。

また、家庭小説（風俗小説）の分野においてはマライヤ・エッジワースがいた。

教育方面においては、特に女子教育においては、寄宿学校が普及し⁽²⁵⁾、歴史、地理学、文学、時事問題を含めたカリキュラムをおくところもあったが⁽²⁶⁾、女子寄宿学校の主流は「たしなみ」—例えば、料理、家事、裁縫などを身につけたり、また、教養として読み方、書き方、算術などとともに音楽、ダンス、絵を描くことなど—を家庭内で孤独な時間を過ごすのに退屈しのぎにも役立つので教わったのである⁽²⁷⁾。

3. オースティンに対する評価

このような時代に生きたオースティンに対して、ほぼ同時代の文豪でもあり、大きな世界を舞台にして小説を書いたスコットは、オースティンの死後から9年後に久しぶりに彼女の作品『自負と偏見』を三度読み返した後で、次のように書いている。

あの若い女性は、平凡な日常生活を送る人達の感情や性格を描く才能を持っていたが、これは私がこれまでに出くわしたのものの中で最も素晴らしいものである。大げさな書き方は他の作家と同様私の本領とするところである。しかし、平凡なありふれた事柄や人物をとらえて真の描写と感情でもっておもしろい物語にするあの絶妙な描写の特徴は、私は真似ができない⁽²⁸⁾。

さらに、スコットは1815年の10月号の「クウォーターリー・レビュー」(Quarterly Review)に、『エマ』の書評をのせるとともに、『分別と多感』と『自負と偏見』についても批評し、オースティンは小説の範囲を、ロマンスの世界ではなく平凡なありふれた日常生活の世界に限定しており、このような新しい傾向の小説を書く作家としては、最も優れている⁽²⁹⁾としているのである。

このように、これまで他の作家があまり手がけることのなかったところに焦点をあわせて書いたオースティンを、人生観察を本領とする新しい作家であるとしてスコットは激賛しているのである。

一方、オースティンとは本質的に異なった作風をもつシャーロット・ブロンテ(Charlotte Bronte: 1816-55)は、自分を高く評価してくれているが同時に「最も偉大な芸術家であり、人間の性格描写の最も偉大な画家である」とオースティンについても激賛している文芸評論家のルイス⁽³⁰⁾(George Henry Lewes: 1817-78)が読むようにすすめていたオースティンの『自負と偏見』を読み終えた後の1848年1月12日付の彼に宛てた手紙において、その作品を評して「ありふれた人間生活の銀板写真」であり「オースティンはただ抜け目なく観察する人です⁽³¹⁾」と不満をもらしており、また、1848年1月18日付の手紙においても「情感も詩もちあわせておらず偉大な芸術家ではない⁽³²⁾」と述べているのである。

さらに、シャーロットは、オースティンの『エマ』を読んだ後の1850年4月26日付のスミス・エルダー社(Smith, Elder & Co.)の文学上の助言者であるウィリアムズ⁽³³⁾(William Smith Williams: 1800-75)に宛てた手紙においても、「上流英国人の表面的な日常生活において正確に描写しているが情熱の点に欠けている⁽³⁴⁾」としているのである。

ところで、ハーンはオースティンの作品については六点をとりあげ、あまりにも繊細すぎて、今日でさえ、文学的素養が十分でないと並みはずれた彼女の

小説の長所を理解できないとしながらも、すべての作品が優秀であり、ひとつは読んでおく必要がある⁽³⁶⁾と述べているのである。

そして、彼女の作品に描かれていることは人々の生活、悩み、おろかな行動などでありその作品のおもしろさは人間(人物)の性格や行動の描写の方法にあるとしているのである⁽³⁶⁾。『自負と偏見』についてはシェークスピアの芝居のようおもしろく、人物達の劇的な真実の生き生きとした様子はシェークスピア的であるとしており、また、「分別」のある姉と「多感」な妹との性格を描いた『分別と多感』と、忍耐の徳をもちすぎるほどもった娘の性格を描いた『説得』を読むようにすすめているのである⁽³⁷⁾。

また、夏目漱石は明治33年にイギリスに留学し、36年に帰国すると、ハーンの後任として、英文学を講じたが⁽³⁸⁾小説について「固より人間相互の葛藤なり、情合なり、有形無形の出来事——人間社会の中に起こる現象の一部——を写した者⁽³⁹⁾」であると述べている。そして、則天去私の作家と作品の例を学生にたずねられると、オースティンの『自負と偏見』をあげ⁽⁴⁰⁾、また、彼女の作品から多大な影響をうけたとされ⁽⁴¹⁾「平易な言葉を使用し、全く装飾を用いないオースティンは写実の大家である⁽⁴²⁾」と絶賛しているのである。

そして、漱石は講義をするにあたって、詩人、小説家、思想家などを引きあいだしている。そのうちのひとりであるレズリー・ステイーヴン (Leslie Stephen: 1832-1904) は、1876年の 'Cornhill Magazine' の中で、オースティンについて「情熱を本領とする偉大な作家と同じランクにはおけないが、上位に位置する作家である⁽⁴³⁾」と述べている。

また、今世紀に入ってからイギリスの女流作家であり批評家のヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf: 1882-1941) は、1913年5月8日付の、'Times Literary Supplement' の中で「イギリスの偉大な小説家を順番に並べてみると、たとへ他にどんな作家がいても、オースティンを上位におかないわけにはいかない⁽⁴⁴⁾」と述べているし、オックスフォード大学の英文学教授でもあり批評家でもあるデビッド・セシル (David Cecil: 1902-86) は「オースティンが亡くなってから119年になるがその人気は高まるばかりである⁽⁴⁵⁾」と述べて、絶賛しているのである。

このように、オースティンを称賛する小説家、批評家、学者をあげれば枚挙にいとまがないのである。

4. ハーンの文学観

ハーンは、文学とは「最も崇高な感動と最も高尚な感情に対して、言語により可能なかぎり崇高な訴えかけをすること⁽⁴⁶⁾」でありさらに、「情緒と感情を表現するものであり一人生を説明するもの⁽⁴⁷⁾」であるとしているのである。

小説について、「人生に対する真理が一たとえ物語の筋それ自体が真実でない場合でもあるいは全くあり得ないような場合でも最もできばえのよい小説の目的とする⁽⁴⁸⁾」ところであり、また、「人生を写しだすかがみ⁽⁴⁹⁾」であらねばならないとするハーンは本物の文学（作品）について次のように述べているのである。

大家によって書かれた偉大な物語は、諸君が読み返すたびに、ますますその素晴らしさを増していくように思われる。そして、幾世代も、何世紀も経て、読む者にとってますます素晴らしいものになっていくのである⁽⁵⁰⁾。

そして、ハーンは良書であるかどうかの決め手やその特色については、次のように述べている。

良書の鑑定法は、一度しか読みたくないか、それとも何度も読みたいかということによって決まる。本当に優れた本ははじめてのときより二度目の方がより読みたくなるものである。読むたびにその本の中に新しい意味と新しい美しさを見い出す。教育があり、趣味のよい人が二度と読みたくないという本には大した価値はない⁽⁵¹⁾。

良書は決して古くならない。その若さは永遠である。若者が偉大な書物をはじめて読むとき、表面的にしか理解できないものである。上面と話の筋だけが吸収享受される。若者が一度目の読書で偉大な書物の本質を見ることなどはとてもできるものではない⁽⁵²⁾。

本の内容について、人間が人生経験を積むに従って、新しい意味を現し

てくるものである。立派な本であれば、十八歳のときに面白くなるだろうし、三十歳のときにはまったく新しい本のように思われる。……なぜこの本の本当の素晴らしさに、以前気づかなかったのだろうかと思う。……偉大な本は、読者の心の成長に比例して成長する⁽⁵³⁾。

このように、良書とその特色については再度読みたくなるか否かによって決まり、良書は若者が一度読んだだけでは表面的にしか理解できるものではなく、人生経験を積み重ねることによって本当の素晴らしさに気づくのであるとしているのである。

また、「しっかりと訓練された正確な観察力をもっている人、また、感受性に富んでいて、しかも、情緒を慎重に言葉を選んで表現する能力をもっている人⁽⁵⁴⁾」であれば芸術的散文を書けるとしているハーンは、目標とする文体については次のように述べている。

何年間も詩的散文を研究したあとで今単純さというものを学ばねばならなくなりました。徹底的に装飾を試みたあとでわたくしは自分自身の過誤によって改宗させられたのです。重要な点は、単純な言葉で人を感動させることです。それにわたくしの文体はまだ定まっていないと思います。—あまりに人工的です。あと一年か二年研究すれば、向上することができると思っています⁽⁵⁵⁾。

このように、ハーンの目標とする文体は飾り気のない、単純で、平易な言葉を使用した文章である。

このことに関して、ハーンは熊本第五高等学校における英作文教育において、生徒が長い文章を好む傾向があると気がつくと、その反対の傾向を養うために、故意に短く簡単に書かねばならないようなテーマを与えて書かせたり、自らも書いて見せたりもした⁽⁵⁶⁾。

また、当時、同校の生徒であった白壁傑次郎も「五校におけるヘルン」の中で次のように述べている。

文章が自由に書けるようになるには二十年の努力を要する。文章を書くには推敲を要する。始め十語で表し得た思想ならば九語か八語か尚少数の語

で同じ思想を表す様に骨折らなねばならぬ。六文字綴りで置き換え得る語はないかと探さねばならぬ。ノットウィズスタンディングと言う様な恐ろしい語は出来る得るならば終生用いぬがよい。長綴りの語を用ふれば章句の締まりが弛む。章句は出来る丈短くせねばならぬと言う様の事でした⁽⁵⁷⁾。

さらに、ハーンは偉大な文学作品を生み出すには一度だけ書いただけでは真の文学は生み出すことはできず、わずかひとつの文章であってもこれを立派な文学にするためには少なくとも三度は書き直すことが必要であり⁽⁵⁸⁾三度、四度、五度と書き改めていくうちに必要でないものと最も必要である部分に気づき、新しい考え方が浮かびあがり、簡潔で、力強い単純なものとなる⁽⁵⁹⁾と述べているように、文章の推敲・添削という大きな労力と骨折りなしには偉大な文学作品は出来あがらないとしているのである。

このことについて、著作中のハーンの苦心する様子を節子夫人は、『思い出の記』の中で次のように述べている。

『怪談』の初めにある芳一の話は大層ヘルンの気に入った話でございます。中々苦心いたしました。もとは短いものであったのをあんなに致しました。「門を開け」と武士が呼ぶところでも「門を開け」では強味がないというので、色々考えて「開門」と致しました。この「耳なし芳一のはなし」を書いているときのことでした。日が暮れてもランプをつけていません。私はふすまを開けないで次の間から小さい声で、芳一、芳一と呼んでみました。「はい、私は盲目です。あなたはどなたでございますか」と内からいつてそれで黙っているのでございます。いつもこんな調子で何か書いているときには、そのことばかりに夢中になっていました⁽⁶⁰⁾。

そして、すぐれた文章の一例として、ノルウェー文学の一節を引きあいにして、その特色として「まず、形容詞がほとんどなく、この話の全体に個人的感情の表現は全くないが、読者の心の中に大きな感情がおこる⁽⁶¹⁾」と述べてもいるのである。

また、文学者の創作する際の倫理観については「文学者は、著述する際、利己的であってはならず、利己的でない作品なら、最小限の価値をもっており、

利己的な人間は偉大な詩人や劇作家になったためしがない⁽⁶²⁾」と述べているハーンは、至高の芸術について「物質的理想をではなく、倫理的な理想を扱うものでありその効果は純粋に倫理的な熱誠 (moral enthusiasm) でなくてはならないと思う⁽⁶³⁾」と述べているのである。

さらに、想像力を重視し⁽⁶⁴⁾、文学を情緒と感情の描写であると見なし、学校や分科大学の外に身を置いていても最善の学習のできる教科目である⁽⁶⁵⁾としているハーンは、芸術家と教育の関係については、次のように述べている。

芸術家として物を見る能力は、教育とは縁のないものであって、教育とは関係なく滋養されねばならない。教育は大作家を作りだしてはいない。それどころか大作家は教育に関係なく偉大な作家となっているのである。教育の効果はあの原始的な感情を必然的に殺し、鈍くするものであるからだ⁽⁶⁶⁾。

さらに、芸術と教育については、次のように述べている。

ある有名な詩人か物語作家の言葉を諸君は覚えていて、諸君自身の感情を表現するときにも、その言葉を用いることであろう。しかし、こういう言葉は諸君自身の感情を表現しないことも確実極まることだ。教育というもの是一般にわれわれ自身の感情を表現するのに、他人の観念や言葉を用いることを、われわれに教えるものである。そして、この習癖は、芸術の一切の原理と全く反するものである⁽⁶⁷⁾。

このように、文学を情緒と感情の表現であるとみなし、学問でもなく、学問の法則によって生みだされるものではないとするハーンは、他人の言葉を用いないで自分の言葉で感じたままのことを表現すべきであるとし、そして、芸術家になれるかどうかは教育しだいではないとし、それどころか、教育は芸術家にとって重要である原始的な感情を弱めてしまうものであるとしているのである。

このことに関して、松江中学校で英語教師として、当時の暗唱主義・詰め込み主義の教育の風潮に逆らって、生徒にテーマを与えて自由に文章を書かせるという自由英作文教育をおこなったハーンは、みんなが一様に同じようなこと

を書き、個人的な特色が全くなく、また、個人的な性格があらわれていないこと⁽⁶⁸⁾を指摘しているのである。

そして、文学を勉強する最善の方法について、自然な形は子供の時から想像力の滋養から始まり、想像力は家庭での教育によって育成され、滋養されるというのが最善の教育方法である⁽⁶⁹⁾としているのである。

5. おわりに

オースティンの場合「田舎の三、四軒の家族があれば小説を書くのに格好の材料である⁽⁷⁰⁾」と彼女自身が述べているように、小説を描く範囲は狭い環境の中に制限されているが、題材について「小さな事に興味をもてず、喜びを見いだせない人は、文学や芸術において本当に偉大な仕事はできない⁽⁷¹⁾」と述べてもいるハーンは、オースティンについて、平凡な日常生活の中に起こる出来事、例えば、恋愛、結婚、対人関係などを鋭く観察して感情的に、情緒的に忠実に生き生きと表現していると位置づけている。

また、オースティンの姉のカサンドラへの手紙の中で、その著書『自負と偏見』のことを「かわいい子供」と呼び、「推敲の時に上手にあちこちを切りとったり、刈りこんだりしたので全体的には『分別と多感』よりも短くなったにちがいありません⁽⁷²⁾」と述べていることからわかるように、文章の推敲の重要性も認識しており、また、小説について「最も優れた精神力が示されているものであり、人間性に関しての完全な知識、人間性の変化する様の完全な描写、最も活気あるヒューモア、機知が選びぬかれた言葉で書かれ、世の中の人々に伝えられる作品である⁽⁷³⁾」と述べてもいる。これらのことから前述したハーンの文体観—簡潔、明快、平易、単純な文体—と重なるところが見いだせるのである。

また、ハーンによれば、偉大な小説とは、一度読んだだけでは、表面的にしか理解できなくても、人生の経験を重ねるに従ってその作品の偉大な本質に気づき、読み返すたびに興味がわき、感動を覚え、再度読みたくなるような小説であり、オースティンの作品が、そのようなものであると認識したからこそ、文学的に素養が十分でないと読みこなせず一般向きではないとしながらも、ハーンは読む必要があると述べたとと思われるのである。

さらに、ハーンは職業作家としてふるまおうともせず、また、名誉をもとめ

ず⁽⁷⁴⁾、芸術家として何ごともぞんざいにせず⁽⁷⁵⁾、知らない世界のことは書かず⁽⁷⁶⁾、しかも、一日の大半を居間にすわって針仕事や世間話をしながら生活習慣を変えようともせず、自分の書齋をもたず、ドアのきしむ音で人の気配を感じると、すぐに吸い取り紙で隠した⁽⁷⁷⁾ともいわれることからわかるように、普通の人間として日常生活を過ごし、しかも、ハーンと同様に正規の学校教育を短期間受けただけの⁽⁷⁸⁾オースティンが、狭い範囲内で可能なこと、すなわち、家庭内に閉じこめられた状況にあっても手軽にできる日常生活における人間の性格や感情の観察・分析をし、力作を書きあげたことに対して好意的な態度をとったことも見逃してはならない理由のひとつであると思われるのである。

〈注〉

- (1) Lafcadio Hearn "A History of English Literature" (Edited by R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki), The Hokuseido Press, 1958, p. 530.
- (2) David Cecil "A Portrait of Jane Austen", Constable, 1978, p. 24.
- (3) Ibid., p. 43. (4) Norman Sherry "Jane Austen", Evans Brothers Limited, 1966, p. 14.
- (5) Ibid., p. 15.
- (6) "Jane Austen's Letters" (Collected and Edited by Deirdre Le Faye), Oxford University Press (Third Edition), 1997, p. 26.
- (7) "Jane Austen", pp. 32-3.
- (8) J・E・Austen-Leigh 'A Memoir of Jane Austen' Jane Austen "Persuasion", Penguin Books, 1965, p. 331.
- (9) Ibid., p. 290.
- (10) "Jane Austen", pp. 15-16.
- (11) 'A Memoir of Jane Austen', p. 285, 305, 319.
- (12) "Jane Austen", p. 20.
- (13) Ibid., pp. 22-3.
- (14) J・P・ブラウン (村松昌家訳) 『19世紀イギリスの小説と社会事情』, 英宝社, 昭和62年, 18-21頁。
- (15) ブリジット・ヒル (福田良子訳) 『女性たちの18世紀——イギリスの場合』, みすず書房, 1990年, 156頁。
- (16) 同書, 131頁。
ビエール・クースティアス, ジャン・P・プチ, ジャン・レイモン (小池滋, 白田昭訳) 『19世紀のイギリス小説』, 南雲堂, 昭和61年, 59頁。
- (17) 『女性たちの18世紀——イギリスの場合』, 22頁。
- (18) 同書, 23頁。
- (19) 『19世紀イギリスの小説と社会事情』, 106頁。
『19世紀のイギリス小説』, 59頁。
- (20) Elizabeth Bergen Brophy "Women's Lives and the Eighteen-Century English

- Novel”, University of South Florida Press/Tampa, 1991, p. 139.
- (21) Virginia Woolf “A Room of One’s Own”, Penguin Books, 1945, p. 56.
- (22) David Cecil (富士川和男, 都留信夫, 鮎沢乗光訳) 『イギリス小説鑑賞——ヴィクトリア朝前期の作家達』, 開文社, 1989年, 30頁。
『19世紀のイギリス小説』, 63頁。
- (23) Mario Praz “Three Gothic Novels”, Penguin Books, 1968, p. 9.
- (24) 『19世紀のイギリス小説』, 68頁。
- (25) Lawrence Stone “The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800”, Penguin Books, 1979, p. 230.
- (26) Ibid., p. 232.
- (27) 『女性たちの18世紀——イギリスの場合』, 62-5頁。82-3頁。
- (28) Valerie Grosvenor Myer “Ten Great English Novelists” Vision Press, 1990, p. 60.
- (29) B. C. Southam “Jane Austen: The Critical Heritage”, Routledge & Kegan Paul, 1968, pp. 58-69.
- (30) 文学界の各分野, 特に伝記や評論の分野で大きな活躍をした文芸批評家。〔Mrs. Gaskell “The Life of Charlotte Brontë” (With an Introduction and Notes by Clement K. Shorter), Smith, Elder and Co., 1914, p. 342.〕
- (31) Clement Shorter “The Brontës: Life and Letters” Vol. I, Hodder and Stoughton, p. 387 (No. 263).
- (32) Ibid., P. 388 (No. 264).
- (33) 出版社スミス・エルダー社 (Smith, Elder, & Co.) で長年にわたって文学上の顧問をしており, 『ジェイン・エア』の原稿を最初に読んで大きな感銘を受けたことを伝え, 同書の出版のきっかけを作った人。また, ハズリット (William Hazlitt : 1778-1830) やハント (Leigh Hunt : 1784-1859) など多数の文学者とも親交があった。 (“The Brontës”, pp. 381-382. “The Life of Charlotte Brontë”, p. 331.)
- (34) “The Brontë”, Vol. II, p. 127. (No. 428).
- (35) “A History of English Literature”, p. 533.
- (36) Ibid., pp. 533-534.
- (37) Ibid., p. 533.
- (38) 三好行夫, 平岡敏夫, 平川祐弘, 江藤淳編 『講座夏目漱石』 第5巻, 有斐閣, 昭和57年, 12頁。
- (39) 夏目漱石 『文学評論』 (上), 岩波書店, 1996年, 53頁。
- (40) 岡崎義恵 『漱石と則天去私』, 宝文館, 昭和55年, 509頁。
- (41) 『講座夏目漱石』 第5巻, 25頁。
- (42) 夏目漱石 『文学論』, 岩波書店, 昭和29年, 346頁。
- (43) B. C. Southam “Jane Austen: The Critical Heritage” Vol. II (1870-1940), Routledge, 1987, p. 174.
- (44) Ibid., pp. 244-5.
- (45) David Cecil “Poets and Story-Tellers”, Macmillan Company, 1949, p. 99.
- (46) Lafcadio Hearn “Life and Literature” (Compiled with Notes by R. Tanabe), Hokuseido, 1925, p. 51.
- (47) Lafcadio Hearn “Life and Letters” (Edited by Elizabeth Bisland) Vol. III, Houghton Mifflin Company, 1922, p. 220.

- (48) Lafcadio Hearn "Interpretations of Literature" (Selected and Edited with an Introduction by John Erskine) Vol. I, Dodd, Mead and Company, 1915, p. 7.
- (49) "Life and Literature", p. 20.
- (50) Ibid., p. 65.
- (51) Ibid., pp. 207-8.
- (52) Ibid., p. 209.
- (53) Ibid., pp. 209-10.
- (54) "Interpretations of Literature" Vol. II, pp. 50-1.
- (55) "The Japanese Letters of Lafcadio Hearn" (Edited with an Introduction by Elizabeth Bisland), Houghton Mifflin Company, 1910, p. 62.
- (56) Lafcadio Hearn 'With Kyusyu Students' "Out of the East and Kokoro", Houghton Mifflin Company, 1922, pp. 30-1.
- (57) 広瀬朝光「五高に於けるヘルン」『小泉八雲』, 昭和51年, 笠間書院, 185頁。
- (58) "Life and Literature", p. 41.
- (59) Ibid., p. 59.
- (60) 小泉節子「思い出の記」, 恒文社, 1976年, 23頁。
- (61) "Interpretations of Literature" Vol. II, pp. 54-6.
- (62) "Life and Literature", p. 40.
- (63) "Interpretations of Literature" Vol. I, p. 10.
- (64) 拙論「ラフカディオ・ハーンの自由英作文教育への一考察」『語学研究』44号, 拓殖大学, 昭和61年, 1-9頁。
- (65) "Some New Letters and Writings of Lafcadio Hearn" (Collected and Edited by Sanki Ichikawa), Kenkyusha, 1925, p. 202.
- (66) "Life and Literature", pp. 56-7.
- (67) Ibid., pp. 54-5.
- (68) 拙論「ラフカディオ・ハーンの自由英作文教育への一考察」, 1-9頁。
Lafcadio Hearn 'From the Diary of an English Teacher' "Glimpses of Unfamiliar Japan" Vol. II, Houghton Mifflin Company, 1922, pp. 133-9.
- (69) "A History of English Literature", p. 745.
- (70) R. W. Chapman "Jane Austen's Letters to her Sister Cassandra and Others" (Second Edition), Oxford University Press, 1952, p. 401.
- (71) "Interpretations of Literature" Vol. I, p. 83.
- (72) "Jane Austen's Letters", pp. 201-2.
- (73) Jane Austen "Northanger Abbey" (With an afterward by Elizabeth Hardwick), The New American Library, Inc., 1965, p. 30.
- (74) "Jane Austen", p. 22.
'A Memoir of Jane Austen', p. 305.
"Poets and Story-Tellers", p. 99.
- (75) "Jane Austen's Letters", p. 20.
- (76) Ibid., p. 269.
- (77) 'A Memoir of Jane Austen', pp. 339-40.
"Ten Great English Novelists", p. 55.
- (78) 拙論「ラフカディオ・ハーンの間観」『法政大学教養部紀要』86号, 法政大学, 1993年, 1-12頁。

尚、邦訳については『ラフカディオ・ハーン著作集』（恒文社）の6、7、9、11、12、14巻及び大田三郎訳『人生と文学』（河出書房）より借用させてもらった。

〈その他の参考文献〉

- (1) Lafcadio Hearn "Books and Habits" (Selected and Edited with an Introduction by John Erskine), Dodd, Mead and Company, 1921.
- (2) G. K. Chesterton "The Victorian Age in Literature", Oxford University Press, 1947.
- (3) G. E. Mitton "Jane Austen and Her Times" (Second Edition), Methuen & Co., 1906.
- (4) 山脇百合子『英国女流作家論』, 北星堂, 昭和53年。
- (5) 福田陸太郎『イギリス女流作家群像』, 駸々堂, 1983年。
- (6) 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説——女主人公をめぐる——』, 開文社, 1986年。
- (7) 都留信夫編『イギリス近代小説の誕生——十八世紀とジェイン・オースティン——』, ミネルヴァ書房, 1995年。
- (8) 久守和子・吉田幸子編『イギリス女流作家の深層』, ミネルヴァ書房, 1985年。